

大田英昭著

『日本社会民主主義の形成』

——片山潜とその時代』

評者：山泉 進

1

本書は、片山潜（1859～1933）の半生、正確に言えば誕生から1914年の日本脱出までの伝記的研究である。著者は近年の「初期社会主義」研究における「重大な欠落」として片山潜についての新しい研究の欠如を指摘し、片山潜の思想と活動を「第二インターナショナルの社会民主主義の流れに正当に位置づける」ことを研究目的とする。このような問題意識から、本書のタイトルとして「日本社会民主主義の形成」が選ばれている。

そのうえで、具体的な研究課題として4つを提示する。第1の課題としては、片山の思想形成の過程を少・青年期に遡って明らかにすること、第2の課題は、20世紀初頭、「初期社会主義」は台頭する「社会問題」にたいしてどのような対処をしたのかを解明すること、第3には1896年、アメリカから帰国した片山が労働問題と都市問題の分野でどのような運動を展開したかを明らかにすること、第4には、これらの成果を踏まえて「黎明期の社会民主主義の思想と運動が片山を軸にどのように形成・展開されたかを明らかにし、その思想史上の位置を究明」すること、とされる（「序章」）。これらの課題解明に対応して、本論は時間軸にそって次の4

部に分けられる。第I部「片山潜の思想形成」、第II部「明治日本と社会問題」、第III部「片山潜と社会問題」、第IV部「社会主義・民主主義と明治国家」である。

さらに詳細に各部の内容をみれば、第I部については、第1章「〈文明〉への開眼—美作の一農村における片山潜」、第2章「勤王家からキリスト者へ—片山潜の「立身」と思想形成」、第3章「片山潜における「社会改良」の論理の形成—社会問題・社会事業・社会福音・社会学」の3つの章、第II部では、第4章「日本における「社会問題」論の形成—日清戦争以前における思想史的諸潮流」、第5章「「鉄工」の思想と明治国家—日清戦後における労働組合運動の黎明」の2章、第III部は、第6章「労働運動の思想—片山潜における労働者の自治と国家」、第7章「都市の思想—日清戦後東京の都市問題と片山潜」、第8章「「進化」と「革命」—片山潜における社会民主主義の形成」の3章、第IV部は、第9章「日清戦後における社会民主主義の形成—片山潜を中心に」、第10章「日露戦後における社会民主主義の再編—明治国家観をめぐって」、第11章「明治末期の社会民主主義の行方—片山潜における「革命」と「改良」の隘路」の3つの章、全体で11の章が設置されて、それらの個別的課題が追究されている。さらに、これらの本論の部分に、序章「問題の所在と研究視角の設定」と終章「総括と展望」とが前後に加えられて、本書全体が構成される。そして、各章における資料的・叙述上の根拠として、丹念な注が付されている。数えてみれば、序章47箇所、第1章80、第2章164、第3章166、第4章132、第5章72、第6章340、第7章153章、第8章157、第9章113、第10章170、第11章268、終章24箇所という数字になり、全体では、1,576箇所ということになる。

以上のように、研究目的と意義の提示、具体

的な課題設定とその解明、整序された全体構成、さらには巻末に付された「資料文献目録」「関係年表」「(事項・人名)索引」、あるいは「注」にあらわされているような資料や研究史への完璧なほどの目配り、これらを見れば、本書が、多くの時間をかけて構想され、また十分な資料的な渉獵のもとに刊行されたかを痛いほどに知ることができる。まさに力作として評価されることは間違いない。

2

「あとがき」によれば、本書は同じタイトルの博士学位論文（東京大学大学院総合文化研究科）に多少の加筆と修正をおこなって刊行されたものであるということであるが、おそらくそれにふさわしい内容と分量を備えているものと評価されたのであろう。そのことに評者も何ら異存はない。ただ、書評ということであるので、全体的な点について4つばかりのコメントを加えておきたい。

まず第1には、片山潜を「社会民主主義の流れに正当に位置づける」という問題設定に関してである。著者は、「序章」において、近年の「初期社会主義」研究のなかで、片山潜についての「新しい研究の欠如」を指摘し、意識的あるいは無意識的に研究視野から遠ざけられてきたことを指摘する。そして、著者は片山潜についての研究の薄さを片山の人格性や日本語能力の問題に帰している（11頁）。たぶん、これまで書かれてきた文章を表面的にみれば、そういうことになるのかも知れない。しかし、それは全く違っていると私には思える。本書では言及される場所は少ないが、かつて評者は、『片山潜著作集』の刊行にかかわり、1985年イギリスのシェフィールドで急死した大原慧から片山潜研究の課題について聞く機会があり、また大原慧の遺稿『片山潜の思想と大逆事件』

（1995）を編集し、その解説を付したことがある。そういう経験を踏まえていえば、「ベルリンの壁」の崩壊以前、「社会主義」研究は、多かれ少なかれ「講座派」的発想とその批判者たちに分裂していて、もっといえば日本共産党の見解と批判的見解があり、片山潜こそは「講座派」、あるいは日本共産党の「党史」的見解にとっては重要な人物と評価されてきた。「社会主義」研究は、とりわけその時代の運動方針やイデオロギーに左右される位置にあった。この点が、幸徳秋水、堺利彦、木下尚江などの研究とは決定的に違う点であった。片山潜をどのように評価するかは、研究者の政治的立場を反映することでもあった。岸本英太郎・渡辺春男・小山弘健、隅谷三喜男、河村望、大原慧らの伝記的研究は、その時代と思想的立場を踏まえなければ理解できない。それ以後、野坂参三の除名事件があり（ということはスターリン時代を生き延びた片山についても起こりうると思われている）、また「大逆事件100年」に日本共産党委員長が声明を出すような時代になってきている。正直いって、片山潜から「共産主義」の枠をはずして、敵対してきた「社会民主主義」の枠におさめたことに、私は飛び上がるほど驚いたが、考えてみれば「社会主義」研究をめぐる時代状況もそれだけ変化してきたということだろうか。

第2には、そのことと関連するが、片山潜を日本の社会民主主義の形成において、中心的役割を担った人物として評価する点である。1901年に、「社会主義を経とし、民主主義を緯として」結成された社会民主党が、日本の「社会主義」の思想的結節点であることは間違いない。そして運動としては日露戦争にたいする「非戦論」として展開された。1983年、「平民社80年」記念を契機にして結成された初期社会主義研究会は、2001年の「社会民主党100

年」を記念して『初期社会主義研究』（第13号、2000）で特集を組み、また記念集会を開き、日本における「社会民主主義」の評価をめぐる議論をしてきた。さらには、私が責任編集者となって『社会主義の誕生』（2001）を刊行した。もちろん、片山潜についても言及している。たしかに片山の回想によれば、日鉄矯正会の動向を背景にして、片山の発議によって社会民主党が結成されたことになっていて、そのことは安部磯雄も認めている。しかし、「宣言書」を書いたのは安部磯雄であり、当時の「社会主義」理解において安部が抜きん出ていることは間違いないと私は考えている。安部のハートフォード神学校での「社会学」受容あるいはベラミーを通しての「社会主義者」としての自覚については、神学校の資料にもとづいて少し言及したことがあるが（『初期社会主義研究』第9号、1996）、片山についても、キリスト教への回心、社会主義思想の受容について、片山のアメリカでの体験についての資料的裏付けをおこなったうえで、もう少し精緻な検証をおこなう必要があるであろう。そのうえで、片山の主導的な役割を確定すべきである。しかし、キリスト教社会主義の強い影響を受けた、安部磯雄や片山潜の「社会主義」理解を、「日本における」と限定するならばともかく、ヨーロッパの社会民主主義とパラレルに語ることには、どうしても無理がある。

3

第3には、その研究と叙述方法に関することである。著者が、文献資料（原資料と研究文献）について、完璧なほどの目配りをおこなっていることについては誰もが驚かされることと思う。考えてみれば、1960年代以後、原資料（新聞・雑誌・著作）についての復刻や全集・著作集の刊行が進み、「初期社会主義」研究に

関しては、ほとんど目の前の復刻版を利用できる状況がうまれている。また研究文献についても1980年代以降は、雑誌『初期社会主義研究』に情報が提供されている。私の世代が資料の発掘を第一の任務としたのとは違って、著者の世代の研究者が、それらの文献をフルに利用することに何ら異存はないし、「初期社会主義」研究の新しいスタイルとして評価したいと思う。しかし、忘れてはいけないことは、原資料の文章は、厳しい言論統制のなかで書かれたものであり、その限られた「言説空間」を常に意識しながら言説の比較や特徴を叙述する必要があるということである。著者の研究方法が、ともすればテキストをフラットに並べて分析し、そのコンテキストについて言及しているだけのようには思えるところがある。たしかに、前半生の片山潜についての、これまでにはない最良のコメント（注釈）がつくられたことは確かである。そのことを評価するにやぶさかではないが、その扱っている文章はほとんどがすでに知られているもので、おそらく本著作の性格からきているものであろうが、読んで「あっと驚く」興奮が湧くところがない。このことは「思想形成」の捉え方にも関連する、著者は、片山の「思想形成」に関して、従来の捉え方、つまり出自である農民の生活と結びついた「忍耐」「努力」という見方を批判して、「文明」および「進歩」に対する信念を提示している。確かに「書かれた文章」を評価すれば、そのようになるかもしれないが、幸徳秋水や堺利彦の思想や活動の根底に儒教的素養があったように、片山においても前者と後者を対立的に捉える必要はない。思想は幾つもの層から形成されている。そして、その人物の「生活」（生きているスタイル）にまで踏み込んで叙述しないと、「思想形成」は捉えきれない。文章には「からだ」がついている。

第4には、「社会主義」研究、とりわけ「初期社会主義」研究の課題に関することである。本書の研究対象が、片山潜と社会民主主義にあり、前半生の片山潜についての「新しい研究」の提示を「社会民主主義」という枠において設定したことは鮮明である。その際、「社会民主主義」は「後続する特定の思想」つまりは「共産主義」によって克服されるべき思想としては捉えられないとされている。このことは当然にも、片山のソ連亡命後の後半生をどのように捉えるかということに関連する。

著者の問題設定は鮮明であるが、そもそも片山潜を対象に選んだ研究動機がどこにあるかは、本書より知ることはできないが、ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム研究が、東南アジアにおける社会主義国家の戦争の解明にあったように、国際的にみれば社会主義研究は忘れ去られるべき対象ではない。日本の異常な研究環境を、著者のような若い世代の研究者たちによって、ぜひ打ち破ってもらいたい。

4

字数の制約上、悪口ばかりを並べているように思われるかもしれないが、これだけの大著の個別的視点のすばらしさを指摘すればきりがないので、ちょっと端折った文章になった。私は、よく酔ったいきおいで、年若い人たちに向かって話すことがあるが、自分は日本の社会主義研究をテーマとして大学の教員になった最後の人間であるかもしれない、と。平たく言えば、日本で「社会主義」を研究テーマに選んでも、それでは「メシ」は食えないと。それほどまでに、「社会主義」研究は日本のなかではガラパゴス化してしまった。確かに、初期社会主義研究会

は現在も継続し、国内外で100名をこえる会員を有し、機関誌も24号（2012年）まで刊行している。しかし、若い会員たちの研究職への就職は厳しい。あるいは、幸運にも職を得ても、初期社会主義からテーマをずらさないと大学での地位を保つことはむづかしい。私自身は、たいした才能もなく、また人並の努力もせずに、大学院に入って以来、幸徳秋水研究からはいつて、日本の初期社会主義を研究テーマとし、「大逆事件の真実をあきらかにする会」の30年に及ぶ事務局長として、いちおう大学教員として現在まで生き延びてきた。それは塩田庄兵衛、大原慧、あるいは森長英三郎、絲屋寿雄、神崎清、堀切利高などという先人の研究者たちと面識をもち、これらの人たちの後押しのもとに、何とか一人くらは大学の教師として残しておこうという隠された意図が、どこかで働いてきたからとしか思えない。

このような逆境のなかで、40歳に満たない著者が、堺利彦の家庭論に興味をもち、博士学位論文として片山潜を選び、今回、勇敢にも660頁にも及ぶ著書を刊行されたことに敬意をあらわさずにいられない。「著者紹介」によれば、現在は、中国の東北師範大学、歴史文化学院教授という肩書になっている。すぐれた研究者は、国境をこえて評価される時代になっている。著者は、本書の刊行において、新しい「社会主義」研究を提示して、「メシ」の食える研究者を誕生させたのかもしれない。

（大田英昭著 『日本社会民主主義の形成——片山潜とその時代』日本評論社、2013年2月刊、664+x頁、定価6,200円+税）

（やまいづみ・すすむ 明治大学教授）